

瑞浪高校首都圏同窓会
川柳を楽しむ会
第2回資料

2020年2月1日
小栗清吾

川柳に見る江戸の四季

(一) 春 (一月～三月)

(二月)

門松 (図1)

立白に芽の出たような松飾り 宝九智1

金槌のいるのはけちな松飾り 安六宮1

門松を大屋はぶぶりぶぶり立て 安四義4

喰い積み (図2)

食つみは松に日の出のけしき也 七六29

喰い積みの髭は野で老い海で老い 八八8

屠蘇

屠蘇をくださいと丈夫な男来る 安六松2

ゆうべの病氣屠蘇散で快気也 傍一2

雑煮

雑煮ができやしたと長持を明け 安五松4

花まぐる雑煮へかける村分限 一六42

年礼 (図3)

松の内麻袴の袖畳み 二39

借りが有るそう御慶に念が入り 二二36

年玉

貝杓子だぞと麻袴で言い 明五信1

松の内鼠も赤い帯を締め 七六31

扇と思や腹の立つ物をくれ 安五仁2

年始帳

上がるなど言わぬばかりの年始帳 明四義6

先妻の親類年始帳で済み 明四礼5

宝船 (初夢) (図4)

宝船逆櫓にしても同じ歌 明四信1

宝船並木の中を呼んで行き 安二松1

三河万歳 (図5)

三河から来て軽薄を言い初め 安二松4

万歳の間こなたで嫁ころげ 傍四8

子供の遊び

のどかさは奴と鳶つかみあい 傍四3

あそこで舞うと羽子板を目へかざし 傍四22

百人をのけて礼者をすわらせる 五九4

屠蘇機嫌子の愛想に旅へ立ち 一七11

七草粥 (七日) (図6)

七種の音春に似ぬせわしなさ 一三1

あした取る爪で齧を摘んでいる 五六4

(二月)

事納め (八日) (図7)

町内の策を見て出す新世帯 安二礼4

事納め大きな策も見苦しい 明六天1

涅槃会 (十五日) (図8)

十四日時分に着婆は匙を捨て 三31

おびただし猫が悔やみに来ぬばかり 明元天2

御入滅はるかの後にはしご出来 傍五27

初午 (図9)

馬の皮叩くも午の日の祭 六五6

このしろが鯛になるのも御縁日 四五17

寺子屋入り

あしたから手習いだあと叩いてる 四五17

二月から目明きの増える有りがたさ 三七8

六阿弥陀

六つに出て六つに帰るは六あみだ 六二一九
六阿弥陀みんな廻るは鬼婆あ 二二二二

(三月)

雛市 (図10)

室町の御所は桃咲く頃に出来 二二一ス4
雛店で花見に行かぬはずにする 明三桜4

雛祭 (三日)

内裏造宮押入を明け渡し 四四7
水引で蛤を釣る雛祭り 二26
雛棚の下でとしまの味をほめ 六二一九

出代わり (四日)

荒つばい下女雛皿が割り納め 二二ス7
浅葱を下女は泣き泣き替えて喰い 明七桜4

潮干狩り (図11)

うららかさ品川沖へかち裸足 一七34
母一人舟の廻りで拾つてる 五14

花見

隅田川桜を浴びる筏乗り 一一五36
花の山鬼の門とは思われず 一一23
土器がそれて桜の花が散り 四四13
御殿山芝の響きで花が散り 五〇2

(二) 夏 (四月、六月)

(四月)

灌仏会 (八日) (図12)

如月は寝て卯月には立って居る 二四25
御誕生嫁をにらめる目を洗い 拾初17

虫除けの歌 (八日)

虫除けを読みよく貼るは無筆なり 六22

千早にて蛆虫めらを追い散らし 三八24

(五月)

端午の節句 (五日) (図13)

にわたずみよけよけ兜持つてくる 五18
男の子出来て夫婦の紋が知れ 宮四27
今に降るぞえと鍵売り値切られる 傍一12
隣へも梯子の礼にあやめ葺き 初12
あやめ売り取り立てという足で来る 安九仁1
菖蒲湯はけんちん鍋へ入るよう 四一40
勇をふるって乳母も飲む菖蒲酒 一一一7
菖蒲太刀乳母どっこいと受け止める 一〇26
味噌と餡この手柏の裏表 一一〇4

両国川開き (二十八日) (図14)

二ヶ国のうるおいになるいい花火 二八21
花火屋はどれも稲荷の氏子なり 八四9
花火売り吉野川一追いめぐり 玉23
口と手とばかり屋根船騒ぐなり 一〇11

(六月)

富士祭 (一日)

麦藁が化けて蛇になる暑いこと 四六23
付け木があかるむと駒込忙しい 三二11

山王祭 (十五日) (図15)

山と田を二年に分けて御上覧 明七仁1
金屏風うぬがのように二日立て 安四鶴1
祭にもけだものを出す麴町 九21

土用干し (図16)

振袖へ縄を引つ込む暑いこと 安六桜2
武者一人叱られて土用干し 四32
六月も娘は膳を据えたがり 明三桜2
二つ三つくぐってすわる暑気見舞い 明三桜2

土用鰻

丑の日にぬらくらとした物を食い 八六1
丑の日に竈で乗り込む旅鰻 七三14

(三) 秋 (七月〜九月)

(七月)

七夕 (七日) (図17)

百人のすけで七夕早く成り 三一20
短冊の外は缺の器用が出 桃人室二一91
悪筆がやたら流れる八日過ぎ 天八蓮2

孟蘭盆会 (十三日〜十六日) (図18)

迎え火になっても親父煙つたし 一五八5
叱られたことも恋しき魂祭り 六三11
鳴焼きをのがれ仏の馬になり 九七6
棚経は尻をはしよつて談誦どくじゆをし 四九9

大山参り (十四日〜十七日) (盆山) (図19)

水の無い月に雨降る山は明き 二九14
納まらぬ頭でかつぐ納め太刀 拾九21
さんげさんげ間男をいたしました 一七7
石尊で鶴より亀はよく見える 安七天1

盆踊り (図20)

盆踊り子をしよつたのが頭分 三3
盆踊りふせぎと見えて男の子 明六天2

(八月)

名月 (十五日) (図21)

隣から隣へ廻る月の白 七五10
店中へ鉄砲玉を十五ずつ 三二24
名月に時々放つて笑わせる 明七梅3
蛤は月見と聞いて死ぬ覚悟 七七38

放生会 (十五日) (図22)

放し亀一日宙を泳いでる 二二ス2

放し鰻も太いのを選っている 二〇31

(九月)

重陽の節句 (九日)

重陽は何にも立てぬ節句なり 二六28
着せ綿を菊の時分に売り歩き 八七16

九月蚊帳 (図23)

お袋は不器な姿に雁を書き 室一一楼3
うとうとしさは雁金を吊つて寝る 安六梅2

(四) 冬 (十月〜十二月)

(十月)

玄猪・炬燵開き

牡丹餅が出来ると火燵口をあき 一二四別43
箱入りを口説きはじめは亥の日なり 三一6

夷講 (二十日) (図24)

夷講酒池肉林で夜を明かし 安六義4
目出鯛をとち万両で買い納め 四四13
縁組みを構わず夷飲んで居る 天四梅2

神無月

正直の頭の軽い神無月 五一1
不器量は暮れまで延ばす大社 二九12

(十一月)

顔見世狂言 (一日)

十月の晦日八百五町寝る 七四26
霜月に来年中の顔を見せ 四二18
顔見世を見に行く顔も宵に出来 武二二16

七五三 (十五日) (図25)

礼服で乳を飲んでる十五日 一四34
一つ飛んだりと袴着吊るし上げ 安五智1
神前へ車で参る七五三 安七智4

酉の町

鳥の町舟でも伏せて行く所 明五智 4
屁の種と欲の種買う酉の町 一四七 20

(十二月)

煤払い (十三日) (図26)

俺だわえ吠えるなという十三日 拾初 25
十三日富札の出る恥ずかしさ 一四 32
あいた口へ餅を入れる十三日 安七鶴 4
十二日から色男狙われる 一八 3

年の市 (十七日〜十八日 浅草寺)

雷も鳴りつぶされる市二日 四五 5
年の市弓は手桶に納めたり 九 29
大黒は市に袂へつつ入り 安七鶴 1

年忘れ

年忘れ忘れずとよい顔ばかり 拾初 23
来年の樽に手の付く年忘れ 三 19
年忘れとうとう一人水を浴び 四 19

餅搗き (図27)

互いに義理を照らし合う鏡餅 一二二 32乙
店中の尻で大屋は餅を搗き 四五 6
大道へかまどの出来る忙しさ 傍四 3
餅はつくこれから嘘をつくばかり 初 36

厄払い

竜宮の甞をも入れる厄払い 二九 22
西の海悪魔外道が泳いでる 八〇 25

掛け取り (図28)

大三十日肝にこたえる頼みましょ 五 30
常体の嘘ではいかぬ大三十日 二 5
雪隠で聞きや帰るまで待つという 安六宮 3
おかわ下げ戸棚を出れば初鳥 一四二 日甲
来たそうだが喰りなさいと大三十日 天二鶴 2

逃げてつて余所の喰い積みこしらえる 一七 40
大三十日首でも取ってくる気なり 三 5
使われぬように掛け取りひよつくら来 明二義 4
提灯を消す掛け取りのはかりごと 拾初 29

門松

○立ち白ハクハク地上に据えて餅などを搗く白。

喰積

「守貞漫稿」その制は、三方に中央松竹梅、けだし真物なり。造り花にはあらず。三方一面に白米を敷くもあり。その上にたいたい橙一つ、蜜柑、橘、かや榧、からくり搗栗、ところ野老、ほんだわら、串柿、昆布、伊勢海老などを積む。（略）江戸の喰積は、正月初めて来る客には必ずまづこれを出す。客もいささかこれを受くの一いちめう搦すれば、元の処へ置くなり。

○野老ノロ鬼野老（オニドコロ）の別名。ヤマノイモ科のつる性多年草。ひげ根のついた根茎を、老人のひげにたとえ長寿を祝うため正月の飾りに用いる。

○ほんだわらホンダワラ海藻の一種。

○一搦イチメ軽くお辞儀をすること。

屠蘇

○屠蘇トソ漢方薬・屠蘇散を浸した酒。これを飲めば一年の邪気を払い、健康で居られる。

雑煮

「俳諧歳時記葉草」雑煮は、餅に大根・芋・いもがしら・昆布・打ちあわび・いりこ・すずな等を加へてあつち薬として喰ふ。

○打ち鮑ウチノミ熨斗鮑。鮑の肉を細長く切り、打ち延ばして干したもの。

○羹カウ魚肉を入れた熱い吸物。

年礼

○御慶申し入れます。

宝船

「俳諧歳時記葉草」大晦日より元日に至る夢を初夢と称す。されど、今俗二日の夜に宝船をしく也。

なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな
ながきよのとおのねぶりのみなめさめなものりぶねのおとのよきかな

長き夜の遠の眠りの皆目覚め波乗り舟の音の良きかな

七草粥

「守貞漫稿」六日これを買ひ、同夜と七日曉と再度これをはやす。はやすと云ふは、まないた 俎になづなを置き、其傍に薪・包丁・火箸・磨子木・杓子・銅杓子・菜箸等七具を添へ、歳徳神の方に向ひ、まづ包丁を取りて、俎板を拍ち噓子て曰く「唐土の鳥が、日本の土地へ、渡らぬさきに、なづな七種、はやしてほと」と云ふ。(略)京坂は、この齋いはいに蕪菜かぶなを加へ粥に煮る。江戸にても、小松と云ふ村より出る菜を加へ煮る。けだし齋をわづかに加へ煮て、余る齋を茶碗に納れ、水にひたして、男女これに指をひたし爪をきるを、七草爪と云ふ。

事納め

「江戸惣鹿子新增大全」八日事納。江戸中町々の家毎に籠を竿に懸て高く屋上に建置く。あかなる故とも知り難し。(天から宝物が降り来るのを受けるためとも、籠は鬼が恐れるものなので鬼を払うためとも言われる。)

涅槃会

○善婆きば 古代インドの名医。釈迦の弟子で侍医。

初午稻荷祭

二月の最初の午の日に稻荷社のお祭り。「江戸府内絵本風俗往来」稻荷の社前にて、地所中の兒童、太鼓を打ち鳴らして踊り遊ぶ。

「東京年中行事」神前へは神酒と揚げとを供え、更に懸け魚と呼んで、鰯(こ)のしる)二尾宛を組み合わせたものを三組か五組位、藁で吊つて神前に懸け。(鰯はこはだの稚魚。炙ると死臭を発するので人気のない肴)。

寺入り

「東都歳時記」此日(初午)小兒手習読書の師匠へ入門せしむる者多し。

(七、八歳で寺入り。)

六阿弥陀

一番・西福寺(北区豊島)、二番・延命寺(足立区江北)、三番・無量寺(北区西ヶ原)、四番・与楽寺(北区田端)、五番・常楽院(台東区上野)、六番・常光寺(江東区亀戸)。全行程六里二十三丁(約25キロ)。

雑市

二月二十五日頃から三月二日まで、雑祭りのための諸調度を売る飯店が所々に出来る。日本橋十軒店(じっけんだな)が最も有名。室町三丁目に隣接している(現・日本橋室町三・四丁目。日本橋三越の一ブロック北あたり)

○室町御所 足利義満が京都・室町に造営した邸宅で、室町幕府があった。花

が多数植えてあつたので、「花の御所」とも呼ばれた。

雛祭り

○豊島屋Ⅱ神田鎌倉河岸にあつた酒屋。毎年二月二十五日から白酒を売り出す。群衆が押し寄せ、怪我人が出ることを心配して、医者を待機させたといわれる。

出代わり

「東都歳時記」四日・五日。奉公人出替り。今日、僕・婢、旧主を辞して新主に仕ふ。

四日まで旧主に仕え、翌日から別の奉公先へ行く。そのまま勤めを続ける場合は「居なり」「重年」という。下男・下女の年俸は一兩二分。

三月四日（納め雛）に浅葱脍（浅葱の味噌和え）を雛に供える。

潮干狩り

「東都歳時記」三月三日。汐下。当月より四月に至る。其内三月三日を節とす。（略）芝浦・高輪・品川沖・佃島沖・深川州崎・中川の沖。早旦より船に乗じてはるか沖に至る。卯の刻（午前六時）過ぎより引始めて、午の半刻（正午）には海底陸地と変ず。ここにおりたちて蛸蛤を拾ひ、砂中のひらめをふみ、引残りたる浅汐に小魚を得て宴を催せり。

花見

御殿山（現・品川区北品川三丁目）。嘉永六年に品川のお台場を築くために切り崩したので、平坦な地になった。

灌仏会

四月八日。釈迦降誕の日。「俳諧歳時記栞草」凡諸寺院、灌仏会を修す。諸品の花を以て、小堂を飾る。是を花御堂といふ。其内に小き釈迦の像を安置し、甘草等の香水を灌ぐ。是を甘茶と云。

甘茶で目を洗うと視力が増すとの俗信があつた。

虫除けの歌

四月八日。ちはやぶる卯月八日は吉日よ神さけ虫をせいばいぞする
この歌を書いた短冊を雪隠に逆さに貼るとウジ虫が生じない。

端午の節句

五月五日。

○にわたずみⅡ雨が降ったりして地上に溜まった水。水たまり。旧暦の五月は

新暦の六月に当たり、梅雨時である。

特に初節句には、兜や武者人形などを贈る。初幟には家の家紋とその下に母方の家紋を染める。

菖蒲鍬 「宝暦現来集」此鍬と云は五六寸程、十文字又は縄打など張ぬきに致し、また木削屑など灰墨にてぬり九尺計の竹の先へさして、一本の代十六文二十文位に売りけり。菖蒲酒Ⅱ菖蒲を切つて酒に漬ける。菖蒲刀Ⅱ柳の木で作つたおもちゃの木刀。

柏餅 「兎手柏このてがしわの両面ふたおもて」コノテガシワの葉が表裏いずれとも定めにくいこと。転じて、物事がいずれか定めがたいことのたとえ。

両国川開き

○武蔵・下総（しもうさ）の両国にまたがることから両国橋と言った。

五月二十八日。この日から八月二十八日まで、三ヶ月間大川筋に涼み舟の遊山が許される。初日には花火を上げた（鍵屋と玉屋）。

○花火舟Ⅱ屋形船などの客の注文に応じて花火を打ち上げた。

富士祭

六月一日。江戸各地に築かれた人工の富士山・浅間神社のお祭り。駒込富士浅間社のお土産が、麦藁で作った蛇。付け木を赤く染めて舌を作る。

天下祭り

六月十五日山王祭（山王日枝神社）と九月十五日神田明神祭は、隔年交代で行われる。江戸城に入って將軍がご上覧になるので、「天下祭」という。

お祭りの行列に山車や作り物が出るが、麴町からは張り子の象がでた。麴町には獣肉を売る「けだもの屋」があった。

土用干し

土用は、立春・立夏・立秋・立冬の前各十八日間の称。土用が明けて新しい季節が始まる。一般に土用と言えば夏の土用。この間に衣類・書籍などを取り出し、日に当てたり風を通したりして、虫を払うことを土用干しという。

土用鰻

平賀源内（一七二八年～一七七九年）。

「明和誌」（一八二二年）「近き頃、寒中の日に紅をはき、土用に入り丑の日にうなぎを食す。寒暑ともに家毎になす。安永・天明の頃より始まる。」

安永（一七七二～一七八〇年）天明（一七八一年～一七八八年）。川柳の初出は七三篇（一八二一年）

「守貞漫稿」江戸にては、兎ある家もなき家も、貧富多少の差別なく、毎戸必ず青竹に短冊・色紙を付て高く屋上に建てる。(略)然も種々の造り物を付るも有り。造り物、(略)ほほづき形、帳面の形、西瓜を切りたる形、筆形等、又枕の引出しより文の出たる形など売る。然れども稀に自作して、種々の形を付する者、往々之有り。

孟蘭盆会

迎え火に「芋殻」(おがら)(麻の皮を剥いだ茎)を焚く。

精霊棚(霊棚)「守貞漫稿」専ら上図の如き棚を造り、四隅に青竹を立て、菰縄を張り、下には真菰筵を敷き、棚の周りには青杉葉にて造りたる籬と云を以て柵の如くにす。此棚上に常には仏壇に置ける位牌を取り出し祭る。

○鳴焼き||材料に油を塗つて焼く料理法で茄子が代表的。

大山参り

大山(伊勢原市・秦野市・厚木市の市境)は、雨降山(あふりさん)という。

山頂に阿夫利神社(石尊大権現)がある。「俳諧歳時記菜草」六月二十八日より江戸及近国の僧俗、相州大山石尊大権現へ参詣す。これを初山という。又七月盆中に登山するを盆山と云。志願あるものは大小の木太刀を携行て、これを納む。その木太刀に、必大願成就の四字を書。これを納太刀という。

○大滝でさんげさんげをぶちのめし 拾三 29

○金亀山与願寺||江島神社。

名月

八月十五日。「江戸府内絵本風俗往来」扱又市中おしなべて団子を製して月に供う。柿・栗・葡萄・枝豆・里芋の衣かつぎを、三方盆へうず高く盛あげたり。団子は大き徑、三寸五分位より、小さきは二寸余とす。此団子に尾花・女郎花等を添えたり。当日前より米を臼にて挽き、団子の粉を作り、十五日朝未明より家内打揃ひて製するを、吉祥としたり。月に供ふる団子の外に小団子を製し、一人に付数十五個づつに、柿・栗等を添へて配分するより、家中多人数ある家にては、いとたくさんに製したり。

放生会

十五日。「日本歳時記」十五日、国俗、今日八幡宮のほとりにて放生会をなす。

亀、小鳥、鰻などを解き放つて、後生を願う。八幡宮などの境内にこれらの生き物売る露店があり、これを買つて川や空中に放つ。

重陽の節句

九月九日。陰陽道五行説では、一、三、五、七、九の奇数を陽とする思想が有り、奇数の重なる一月一日（後に一月七日）（人日）、三月三日（上巳）、五月五日（端午）、七月七日（七夕）、九月九日（重陽）として、目出度い日とした。一月門松、三月雛、五月幟、七月笹、を立てるが、九月は何も立てない。「着せ綿」九月九日の夜に、菊の花に綿を載せ、それを翌日に取って、湿り気のあるこの綿で顔面を拭うと、老いを去ると言われる。

九月蚊帳

「守貞漫稿」三都ともに九月朔後、蚊未だ去らざる時は、紙に雁を描て（蚊帳の）四隅に之を付す。

玄猪（げんちよ）・猪子餅（いのこもち）

十月の初の亥の日を玄猪という。この日の亥の刻に新穀で搗いた餅（猪子餅）を食べて収穫を祝う。この日から火燧をしつらえる（火燧開き）。

夷講

十月二十日夷講。商家では、夷像を安置し鯛を供える。酒肴を揃えて祝宴を開き、鯛などに千両・万両の値を付けて競り売りの真似をする。神無月はすべての神様が出雲に集結して縁組みの相談をされるが、夷のみ居残りする。○とち〓十千。千の十倍の意。数の多いこと。

顔見世芝居

『日国』江戸時代の各座は十月に一年契約で役者その他の入れ替えを行ったが、十一月から新加入の役者を加えて一座総出演で行う興行を言う。

「東都歳時記」夜七ツ時（午前四時）より前狂言・脇狂言・色子・子役、大勢の大踊り、終わって後、新狂言顔見世の始まりなり。

○江戸の芝居三座〓中村座（堺町）、市村座（葺屋町）、森田座（木挽町）。

七五三

「東都歳時記」十五日。嬰兒宮参（みやまいり）。髪置（かみおき・三歳男女）袴着（はかまぎ五歳男女）帯解（おびとき七歳女子）等の祝ひなり。当月始の頃より下旬迄、但し十五日を専らとす。尊卑により分限に依じて、各あらたに衣服をととのえ、産土神へ詣し、親戚の家々を廻り、その夜親戚知己を迎えて宴を設く。

帯解きの女子は着飾って出入りの職人の肩に載せられて宮参りする。

西の町

十一月の酉の日に行われる鷲大明神のお祭り。本社は、足立郡花又村（現・足立区花畑）本立山長国寺にあり、浅草竜泉寺町にあるのは分社。現在は鷲神社と書いて「おおとりじんじや」と読む。お土産は熊手や唐の芋（里芋の一種。海老芋）。また賭場が立った。花又村へは綾瀬川を舟で遡上する。

煤払い

「東都歳時記」十二月十三日。煤払、貴賤多くは此日を用ゆ。大城の御煤払の例は、寛永十七年庚辰十二月十三日に始まりし由、前板の冊子に見へたり。家内に煤竹を入れ、すす餅を祝ふ。

年の市

「東都歳時記」十七日。今日明日、浅草年の市。

（お飾り）注連縄・三方・裏白・ほんだわら・橙・ユズリハ。鯛・海老・山芋・野老・昆布・干し柿・破魔弓

（台所用品）俎・手桶・柄杓・摺り子木

○大黒舞＝大黒頭巾に打ち出の小槌という扮装で舞う祝福芸。「一に俵を踏まえ、二にっこり笑って、三に盃を頂いて、四に世の中良いように……」

○弓は袋に太刀は鞘＝太平な世のたとえ。

年忘れ

○師走油＝師走に油をこぼすと火に祟る。火事を防ぐには、こぼした人に水を浴びせると良い。

餅搗き

十二月二十過ぎから二十六・七頃までに餅を搗く。「東都歳時記」すべて下旬、親戚に餅を送り、歳暮を賀す。これを餅配りという。塩魚・乾魚を添えるなり。

厄払い（やくはらい）

節分の夜に、各家を訪ねて、「御厄はらいませう、厄落とし」と唱え、招かれると、目出度い七五調の祝辞を述べ、代価として鬼払いの豆と十二文のお捻りを貰う。

おん厄払いませう厄払い。今晚今宵の御祝儀に、目出度い尽くして払いませう。鶴は千年亀は万年、東方朔八千年、浦島太郎は三千年、三浦の大介百六つ、かかる目出度き折からに、如何なる悪魔が来たるとも、西の海へさらい、おん厄払いませう厄払い。（駒村「大辞典」）